

# 大陸(中支)

## 私の大陸戦記

### 西江遡行

東京都 宮嶋 政久

昭和十九年六月、独混第二十二旅団・独歩第一二五大隊第四中隊の一員として湘桂作戦に参加、九月下旬には梧州に入城していた。引き続き梧州より西方の西江沿岸の諸都市を占領、防衛に任じていた。

大隊本部は平南に、中隊本部は江口墟に位置していた。広東省古井を出陣以来、被服の補給が無かったので、命令で田賀部隊は被服受領の班を編成し広東へ向け出発した。

佐竹重恵小隊長、稲井久慶中隊長に申告し、平南の部隊本部で他中隊の受領者と合流し、西江を船で下り広東から遡行したのである。

晴天は望めない天候だが雨はない。しかし船舷に寄ると顔に水飛沫の洗礼を受ける。ザザッ……ジシャッ……と水飛沫を上げて、下流へ下流へと庄する流れに逆らって遡る船足は思ったほど進まない。

流れは大きく淀み、舷側に当たる水飛沫の音だけが耳を叩くように伝わってくる。静かな中にも流れは不気味にうねり横たわっている。ときおり流れに沿って行き交う舟板を操る住民の日焼けした顔には、戦争などどこにあるのだろうか……、何処でやっているのだろうか……、まるで無頓着というのか、どこ吹く風といったような素振りである。素朴な中にも逞しさがほ

とばしる。腕っ節のいい蛋民船の遡行との出会いである。

ピシャ、ピシャと水飛沫を上げて追い抜いた舟板の中から「シーサーン……メシ好……」と声も一際大きく、いま捕獲したばかりの生きのいい鯉を掴み、高々と頭上に掲げ平手で叩いて見せた。目尻を下げ精いっぱい愛嬌をふりまいての表情だ。とても嬉しそうである。素早い手料理、西江の黄土色をした水で魚のはらわたを断ち切っては洗う即席料理、「鯉のあらい」を手掴みで食ってみせる。

所変われば品変わる、こんな食い方もあるのか、と呆然としてその様子を見送った。彼らにしては身についた生活の知恵であり、魚に限らず生命の糧となるものは、いつでもどこでも安易に食べられたのであり、いつでもどこでも食べられることは、激動の中国大陆に生きるための一つの手段であった。

階級差はあるだろうけれど美食を奢る中国人の中にも、こういう食べ方もあることを目の前で知らされた。

黄土色に流れる西江は、途中で北江・東江と合流して文字通りあかい河となり、広東へ珠江へと注ぎ、湘南デルタ地帯の繁栄をもたらす。

彼等のむしゃぶりつく「鯉のあらい」からは、即、日本内地でのマグロの刺身を連想する心の持ち合わせはなかった。

こんなに濁った西江の水で作った「鯉のあらい」をちよいの間にバクつく彼等の消化器は、余程鍛錬されたもので、消化器が免疫になっているのだろうと思いい、一瞬呆然とその食う姿態を眺めていたが、こっちの食欲などは全然起こってこない。

ここにも人種と習慣・環境の違いと戦国動乱の中に根強く生きる民族の心根を再発見した。

西江遡行の彼等は単独で舟を操る者、二、三艘で曳行するもの、舵取りを船中に置き、綱を肩にかけて船を曳く張って船の遡行原動力となって土手岸を歩いていく方法もあり、俗に言う蛋民船が集団で遡行するという場合などもある。

いま出会ったのは、船と曳行する複数の乗組員がい

る方である。こちらより速力の遅い彼等を後にどんどん上流へ遡っていった。時は昭和二十年三月中途を過ぎていた。

節兵団は西江沿岸に点在し、第一二五大隊第四中隊は駐屯地の江口墟に、部隊本部は既に潯州へ移動していた。

梧州以西の各部隊は沿岸に駐屯し、警備強化は既に述べたが、沿岸警備隊の充実と、海軍掃海隊、啓開隊の三水から梧州に至る間の西江水路の機雷撤去は大いに役立ち、西江の遡行はかなり優位にできるようになった。

広東出張を命ぜられたとき、今回の出張は極めて重要性を帯びた任務であると人事係から諭されたが、前回の遡行と異なり、省境近くになると何故か険しい雰囲気が漂ってきた。

第四中隊の元の駐屯地九官圩付近はことなく通過、徳慶も過ぎ、やがて梧州も近くなったころ、突如、雲間を縫ってキーンという金属音を残して上空を掠めた敵戦闘機、雲間を出たり入ったりの哨戒をしていたか

に見えた強敵P51（通称・ピーゴロ）、ムスタングP51とロッキードP38の双胴の二機。アーンという間に降下し、機銃掃射をして、その機影は山陰へと消えていってしまった。

友軍のバリバリ……ダァーンという対空射撃に我々の五体はピンと緊張する。反射的にバツと攻撃態勢をとる。と同時に右舷にいた体が一瞬にしてデッキに投げ出され、いやというほど左舷のデッキ隅に叩きつけられた。ドスン。「アッ……痛てて」「ウーン」。血飛沫を上げて一つの物体がデッキに叩きつけられ、われらと一緒に転がっていた。

この船の整備兵で対空監視哨に立っていた若い上等兵が、血だらけになって吹き飛ばされてきたのだ。一瞬気絶したこの兵はデッキにぶち当たったショックで息を吹き返した。「痛いよう……おっ母さん、おっ母さん……痛いよう……痛いよう……」

われら兵隊は、出征以来、母を呼ぶ声など聞いたこともないのに、はじめて出遭った凄惨な中での叫び声であった。

真つ赤な血潮を飛び散らかして呻いている甲板上の傷者に、われら兵隊は手の施しようもない。機銃に撃ち抜かれた若い上等兵の手首が甲板上でピクピク、ピンと動いている。たつたいま、射撃でもぎとられた手首がはねているのだ。

撃たれた兵は、精いっぱい声を張り上げて甲板を転がって泣き叫んでいる「おっ母さーん……」。人間の身体部分を離れた手首が、別個の物体となって動いているのを見たのもこれが初めてである。生きている動物や魚を組板の上で切った時のあの状態とまったく同じだ。

この兵隊は、船の救護班の素早い動作により収容されたが、出血が夥しかった。他にも負傷者がいたが詳細はわからない。

正確には何人負傷者が出たのか定かでない。デッキに数人叩きつけられたのは事実である。いま、低空で頭上を掠めていったP51は、一瞬の仕業で敵ながら正確な地上掃射の腕前を発揮して見せた。この遡行作戦の最初の犠牲者が出た。

泣き叫ぶ重傷者は力尽きたか、また気絶したのか、次第にその声は小さく静かになっていった。

初年兵時代、病弱の同年兵、H上等兵が軍隊生活に耐えられなくなり、ついに小銃で自分の心臓を撃ち抜き果てたのを皮切りに、これまで数人介抱し血を見てきたが、こんなに物凄い場面にはぶち当たったのは初めてである。

こういう場面に直面すると、言葉に表せないほど敵愾心が旺盛になるものだ。

この船にはいろんな兵科の兵士が乗っている。その兵士たちの瞳、全神経が対敵に集中、即攻撃態勢に入っていたが、なかでも歩兵の動作はきわめて素早かった。甲板上で小銃での対抗は無意味なことと考える余地もなく、歩兵の本領、仇敵に対する攻撃動作は凄まじいほど敏捷であった。

負傷した上等兵は、どこの所属隊員であるのかかわらないが、直ちに広東の病院へ後送になっていった。無事助かることを祈るのみで、その後の様子は全くわからない。

「目標……十五時の方向……敵機来襲！」「機種一P51……」大きな声でがなりたてるヤンマー隊長（この船のヤンマー製の護衛船）は、向こう鉢巻きで指揮を執っている。まさに勇姿とは、この姿であろうか、と実に頼もしく見えてきた。

われら乗船員は「すぐ避難するように」との警備隊長の命に服し、警備隊の指揮下に入った。静かな西江遡行も一変して阿鼻叫喚の戦闘状態になる。「畜生やりやがったなあっ！ ピーゴロ奴……」みんながいきり立った。

当時、ムスタングP51は敵戦闘機の花形で、友軍の非力な制空権を侮り、好き勝手に大空を飛んだ。翼に二五〇キロ、または二二五キロ、一一〇キロ等の爆弾を二個搭載できる優秀な戦闘機である（常時出動には二二五キロを搭載した）。この戦線の日本軍は、このピーゴロに散々悩まされていた。

そのピーゴロの投下した爆弾が左舷付近に落下したのと同時に、これに呼応して、いつの間にか中国（国府）軍の砲撃が開始されたらしい。不幸中の幸いか直

撃を免れ、水煙と共に一瞬左舷へ傾いたわけである。平穩を装っていても、空襲があるときは、必ず敵の密偵が走り、同時に攻撃してくるのが彼等の常套手段であった。誰いうとなく、「これが戦争さ。いつやられるかわからねえよ！」と吐き捨てるような声が聞こえる。

「野郎！ ピーゴロ奴……叩き落してくれろ」と息巻く対空射撃手の腕は確か。見事ピーゴロに命中した。瞬間の戦闘でP51は、もんどり打って西江の流れに没していった。

西江沿岸警備隊は、通称ヤンマー隊と言ってヤンマーディーゼル・エンジンを搭載した船舶隊で、大尉を長とする編成で独立行動をとり、友軍部隊の西江遡行を護る任に当たっていた。この警備隊の行動は相当重要性を帯びた大任であった。

興奮の面持ちで語る警備隊長の言動によれば、P51の地上掃射は敵ながら実に天晴れである、と舌を巻いて話していた。

過日、西江沿岸を梧州へ向かって行動中の車輛部隊

があった。今日は、まず大丈夫だろう、ということで行動開始した直後、車輛部隊の最先端へ、山陰から突如襲いかかったP51がダダダッ……と地上掃射を加えてきた。一瞬パッパッと火の手が上がる。二機目に飛来したビーゴロは最後尾へ……。三機目が爆弾を投下、悠々と旋回して地上を掃射、パッパッと燃え上がる火の手(車輛)を尻目に飛び去る。この間、友軍機は一機も来ない、車輛部隊はなす術もないままに餌食となっていた。

憎っくき奴、P51の胴体には、晴天白日旗と星条旗を表した“星”のマークを鮮やかに染め抜き、暴れまわっていた。飛び出した敵機は独特な金属音とこのマークですぐ見分けがついた。パイロットは勿論、訓練された新鋭アメリカ兵である。

非力な我が方の制空権に、ますます増強を図る敵機ビーゴロの独り舞台に、隊長は大きな憤りをぶちまけていた。全く予期しない戦闘が瞬間に起こり終わった。これが戦争である。

西江遡行の無事終了を祈るヤンマー隊の西江沿岸警

備隊を後に、いま終わったばかりの不気味な戦闘の余韻も重く、遡行を続ける船団は、ようやく小雨煙る宵闇の中を上流へ……梧州へと遡っていった(梧州は広東西方二〇〇キロ地点にある)。

戦争は如何に非道であるか、体験者以外でも歴然とわかる。それほど、酷いことである。勝敗はともかく国民にのしかかる負担は、計り知れないほど大きい。まして敗戦国はなおさらである。戦争は子々孫々に至るまで再び起こしてはならない。起きてはならないものである。

〔注〕

梧州は広東広西省境に位置し、軍事上、経済上重要な拠点で、梧州と広東を結ぶ当時唯一の交通機関としての西江は極めて重要な役割を果たしていた。日本側が、その拠点を押さえてからは、珠江を遡って海軍の砲艦クラスまで入るようになった軍事上の重要な拠点であった。

余談だが、梧州は敵に制空権を完全に奪われてから連日空襲があり、敵は戦爆連合で、コンソリテッドB

24、ノースアメリカンB 25、ムスタングP 51、ロッキードP 38の編隊飛行で襲うようになり、彼我空中戦が展開された。

たまたま梧州に停泊中の海軍砲艦もこの戦闘に加わり、対空射撃の機関砲で、野生の馬の急降下爆撃機にも転じられるムスタングP 51、P 38の戦闘機を撃墜したそうだが、その報復措置として物量に物を言わせ、戦爆連合で一気に襲われ、遂にその砲艦も梧州江内深く、時の流れの明暗を象徴するかのように、西江の流れに沈んでいった。

体験記筆者宮島氏の戦闘経過は、昭和二十年四月二十五日以降、特に独立混成第二十二旅団が第十一軍隷に入り、いわゆる、湘桂撤退作戦中の戦闘体験が主である。